

ホーソーンの「呪われた原稿」：オベロン物語を中心にして

井坂，義雄

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要．外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要．外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

41

(開始ページ / Start Page)

37

(終了ページ / End Page)

51

(発行年 / Year)

1982-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00005354>

ホーソーンの「呪われた原稿」

——オベロン物語を中心にして——

井 坂 義 雄

紛失したのではなく、火災に会ったのではなく、自分の書いた原稿を、自分の手で焼いてしまったという話は、ホーソン自身が語っていることなので、現実起こった話に間違いないが、何か、まだ知られていない彼の人物に、明快な解決の鍵が隠されているのではないかと期待する者にとっては、興味のあるエピソードになっていく。燃えてしまった原稿が、どんな内容のもだったか、ということもあるし、また、このエピソードに、さらに裏のエピソードがあるのではないかと勘ぐる向きもある。そうした期待は当然だし、いつまでも、消えることはないと思う。しかし、この行為に関連することでは、彼自身が、いくつかの所で、それなりの説明に相当するものを表明している、と断定することも、あながち、乱暴なことにはならないと思う。

まず、識者の頭に浮かぶものとしては、「原稿の中の悪魔」(「The Devil in Manuscript」)が挙げられよう。法律を学びながら、文学の修業にも励んでいる、オベロンという若者を、ある友人が、はるばる遠くから訪れる、という書き出して、オベロンが、この友人を前にして、自分の原稿を焼いてしまうのを頂点に、やがて、煙突から飛んで出た、原稿の燃えさしか、火の粉が、町に火事をひき起こしてしまう、という結末になっているこの短篇は、主人公のオベロンが、一方的に話し、一方的に行動するだけの、いわば、たわいのない作品、と言ってもいいと思う。ところが、原稿を焼く行為に移る前に、主人公は、それぞれ密接に関連していて、一つ一つに切り離すことのできない、きわめて、はっきりとした、いくつかの点を、目の前の友人に語っているのである。

「これらの作品を書くことが、ぼくに、どんな影響を与えてきたか、きみには分からないだろう。ぼくは、これまで、夢のようなものを、夢中になって追い続けてきたのであって、しっかりと世間の評判なんかには、無頓着だった。ぼくは、いま、幻に取り囲まれていて、そいつらは、本物そっくりに、人生をまねるものだから、困ってしまうんだ。そいつらのおかげで、ぼくは世間の常道を踏み外してしまい、奇妙な孤独——人の居る真ん中に居る孤独——だれも、ぼくのやることを望むわけじゃないし、ぼくが考えたり、感じたりするように、誰もしくないような場所に、ぼくは迷い込んでしまったんだ。これも、みんな、もとはと言えば、これらの作品のせいなんだ。これが灰になれば、たぶん、ぼくは、もとの自分に戻る。⁽¹⁾」

この前のページには、原稿の中に悪魔が居る、ということや、魔術の記録のことや、自分の頭で作り出したものが怖い、という気持や、人の幸福を、血を吸うように吸い取る、悪魔の性質のことや、それができるのも、「これら呪われた原稿」(these accursed manuscripts)⁽²⁾のためだ、ということが述べられていて、ここに引用した部分では、これらのことが、さらに敷衍され、もっと落ち着いた形で説明されている、と考えていい。彼の嫌悪の対象は、自分の書いた作品であると同時に、それを書いている途中で生み出した、お化けのような幻が、現に、いま、自分を取り巻いている、という事実であり、世間から切り離されて、孤立していることであり、原稿に隠れて、これらを実現した悪魔が居る、ということである。ところが、自分の原稿を怪しげな目で見つめる、このオペロンの口から、これらとは別の、もっと激しい嫌悪の対象が、じつに辛辣な形で語られる。それは、出版人、それも、とくに、アメリカの出版人である。もらった返事の手紙は焼いてしまった、と告白した彼は、教科書しか出版しない人や、自分の本を出版するのがいやで、わざわざ、商売をたたもうとしている人や、こちらで費用を負担して、はじめて、なんとか引き受けそうな人や、予約出版を勧める人や、さんざん批判したあげく、断わった人などの例を出したあとで、次のように言う。

「しかし、こういった、十七人の不正なやつらの中で、たった一人、正直に思えるやつが居て、そいつが、偶見ぬきに言うところでは、アメリカの出版人は、アメリカ人の作品なんかは、手を出さないだろうし、たとえ名の知れた作家だって、事情は、あまり変わらない。ましてや、新人の作品なんて、損害を当人が負担するのだから、いかに、ぜんぜん相手にしないだろう、ということなんだ」⁽³⁾

続いて、これが原因で、自分の作品を見るのもいやになり、ちょっと見ただけでも腹が痛くなると言い、原稿の中に悪魔が居る、と彼は繰り返す。そして、原稿が燃えるのを見る時の、ぎらぎらするような喜びを、自分は期待している、と友人に語る。

ここで、嫌悪の対象を、もう一度、振り返って見ると、原稿そのものは別として、悪魔といい、幻といい、自分の作品を受け入れようとしないう、アメリカの出版人といい、いずれも、オペロンその人の責任とは、じかに結び付かないような、あるいは、必ずしも、結び付かなくてもいいような、外的なものであることが分かる。いやでたまらないものが、いやだと思ふ当人の内面と、深いかわり合いを持たないならば、これは、単なる気まぐれではないし、どこにでもある、投げやりの精神を、少しばかり脚色したにすぎない、ということにしかないだろう。「自分の頭で作ったものが怖い」という言葉もあるが、これが、作品の嫌悪につながるためには、ちょっとした、精神の乱れがあればいいことだし、作品がなくなれば、怖いこともなくなる、というわけにはいかないだろう。問題は、もっと根が深く、総体的なのだ。

いざ、原稿を焼こうとして、オペロンは、不思議な告白を始める。それは、原稿が成立するまでの、成立過程でも言うべきもので、いろいろと想像を巡らしていると、自分の身は、魂だけとなり、天に昇って、天の川に沿って走っているように思ったり、馬車に乗って、構想を巡らしていると、車輪の音や、乗客の話し声のほうに、夢のようになってしまう、頭の中の幻が、あざやかな現実となり、夜は夜で、ひとたび、幻が頭に入ると、それは、いくら消そうとして努めても、消えないでいて、やがて朝になると、自分は、ばっちり目覚め、しかも興奮してい

るといった具合で、いわば、自分は、自分の魔法にひっかかった被害者だ、と彼は言うのである。

「……ときには、ぼくの考えというのは、地に埋まっている宝石みたいなもので、掘り出してやったり、みがいて、光らせることも、考えなくてはならなかった。もっと、しばしば起こったことは、まるで、砂漠に、とつぜん吹き出した水のように、甘い思考の流れが、急に紙の上に、ほとぼしり出て来たことなんだ。それが済んでしまうと、ぼくは、どうにも仕様のない状態で、ペンをかんだり、あるいは、まるで、ぼくと、ぼくが書くようにしているものとの間に、氷の壁があるみたいに、冷え冷えとした、みじめな労苦を味わいながら、ただ、まごついていただけだった」⁽⁶⁾

そして、現に、でき上がった原稿を見ると、

「……いちばん美しい色で書いた、と思った絵も、色あせた、あまり、はつきりしないものにしか見えない。ぼくは、ただ、夢の中で、しゃべりまくり、詩的な気持になり、⁽⁶⁾自分を良くしていただけた。そして、ほら、ごらんよ。こうして気がついてみると、すべてに意味がないんだ」

友人が止めるのを、振り切るようにして、あくまでも燃す、と言い張る彼は、人のあざけりや、中傷や、冷淡な態度や、気の毒だと思われて、心にもないお世辞を言われることなどを、軽く、あしらいながら、日をぎらつかせて、次のように叫ぶ。

「……ぼくは、ちゃんと墓に入れられるような、普通の人間と違った、社会ののけ者だ。生きている時は、尊敬されないし、死んでしまえば、なんだ、あんな奴は、と思い返されるだけで、ぼくの灰なんか、不注意な人の

足で、け散らされてしまうかもしれないんだ……」⁽⁷⁾

三つの引用を見てみよう。まず、作品を書いている時の、個人的な体験がある。次には、感情的であるとは言いがたが、一つの自己認識が続いている。そして、最後は、もう、やけっぱちとしか、言いようがない。しかも、このあとには、もう二度と、作品を書くことがないようにという、祈りのこもった言葉があるだけで、やけっぱちだから、どうなっても構わない、ということにはなっていない。むしろ、原稿さえ燃してしまえば、原稿を成立させた、もろもろの精神状況や、外界からの汚名や恥辱まで、消えてしまおうといった口ぶりだ。ここに、「呪われた原稿」の背負っている、一つの役割と意義がある。「悪魔」についても、同様のことが言える。「呪われた原稿」の中味が、どんな内容のもだったか、あるいは、オベロンが、原稿の中に居ると信じた悪魔が、どんな属性であったか、ということとは、あまり大きな問題ではない。「呪われた」という以上、呪う主体があるわけだが、それが、忌々しい気持を抱く、オベロンその人であって、悪魔というような、第三者の役割が、あくまでも控え目なものであってみれば、自分の書いた原稿を、忌み嫌うということは、まさしく、自己嫌悪そのものにしかならない。したがって、原稿を焼くという行為は、自己の代替物を焼くということであり、一つの危機からの脱出、を意味することになる。

一八三五年の十一月に、Ashley A. Royce というペンネームで、『ニューイングランド・マガジン』に発表された「原稿の中の悪魔」は、一八五二年（実際は一八五一年）⁽⁸⁾に出版された、短篇集『雪人形・その他』*Snow-Image, and Other Twice-Told Tales* に、初めて収録された。つまり、これより前の短篇集『トワイニス・トルド・テールズ』*Twice-Told Tales* (1837, 1842, 1851) にある『古い牧師館の昔』*Mosses from an Old Manse* (1846) にも載らなかった。ところが、一八五一年の『トワイニス・トルド・テールズ』の序文を読むと、内容的に、この作品と共通する、いくつかの点が浮かび上がってくる。もちろん、この作品の入っている『雪人形・その他』にも序文があって、これにも、同じような感情が流れているが、すでに『緋文字』*The Scarlet Letter* (1850)

の作者として、名を成したホーソンが、無名時代の、いわばフラストレーションを、一気に、ぶつけたような、『テールズ』の序文のほうに、はるかに率直で、厚みのあるものになっている。一方は、主人公の登場するフィクションであり、一方は、作者が読者に伝える、前置きの言葉であるのに、この二つの文章に流れている情感は、明らかに一つである。この二つの文章の間には、十五、六年の歳月が流れているとはいえ、人生の中で、一つの情感が生き続ける時間としては、決して長いとは言えない。

『トワイヌ・トルド・テールズ』の作者は、ぜひ言っておきたいことが一つあって、これについては、仲間
の者たちが、誰も口をはさもうとは思わないだろうから、何の心配もなく言っておこう。彼は、かなり長い間、
アメリカで、いちばん名の知られていない文士だった。⁽⁹⁾

こんなふうに切り出したホーソンは、オペロン青年の持つ、言葉の激しさこそ出さないものの、オペロン青年
が示したような、出版人に対する恨みや、冷たい読者に対する、びりつとした苦言を、さらりと saying のけなが
ら、自分の作品に対する嫌悪を、もっと淡々と、しかも、冷静な判断力を誇らかに歌うようにして、読者に説明し
てくれている。

この創作の楽しみというのは、それなりに、間違っているとは言えないし、この種の仕事の取り柄としては、
欠かすことのできないものなのだが、また一方では、長い間たつうちに、作家の心に、悪寒を呼び覚ましたり、
指先の感覚をなくしたりさせるものなのだ。この期間に、この本の中の、四十かそこらの小品を書いた以外は、
作者の、この時期の思考や、勤勉の印となるものを、作者が何一つ示すことができないのは、いちばん激しく、
心を燃え立たせてもよかった時代に、まったく、思いやりというものを、持たなかったせいなのだ、と読者は考
えていい。⁽¹⁰⁾

説明は、なおも続く。オペロン青年が、夢のようなものを、夢中になって追いつけたことや、幻に取り囲まれて、孤立してしまったことや、冷え冷えとした、みじめな労苦を味わったこと、現実の世界から切り離されているのではないか、という、いら立たい体験が、もっと落ち着いた、わびしさを伴って、思い返されてくるのだ。

これらの作品には、遠く人里離れた物陰に咲く、青白い花の色合いがある。つまり、どの作品の感情にも、観察にも溶け込んでいる、瞑想癖という冷たさがある。情熱というよりも感傷があつて、日常生活を描写するつもりでいる時でさえ、寓意を使い、これが必ずしも、生きている、暖かい血の通った人間になっていないものだから、読んだ人は、そら恐ろしくなってしまうのだ。力不足なのか、それとも、どうにもならない自制から来るのか、はつきりしないが、この作者の書きぶりには、しばしば、精彩のなさが目立つ。これでは、最高に陽気な男だつて、作者の言っている、最高に明るいユーモアに、笑おうと思つても笑えないし、たとえば、最高に優しい女性だつて、作者の表現している、最高に深い悲哀に、暖かい涙を流すわけにはいかないだろう。この本から、もし何かを読み取ろうとするならば、この本が書かれた時の、澄み切つた、とび色の、薄明りの中で読む必要がある。日の光の中で開くと、まるで、何も書いてない本のように、見える恐れがある。⁽¹¹⁾

オペロン (Oboron) というのは、ボードン大学における、ホーソーンのニックネームであり、じつさに彼が、ペンネームとして使つた名でもあるので、オペロン青年を、そのままホーソーンに結びつけることは、それほど無理ではないし、じじつ、また、そう受け取られている。⁽¹²⁾ところが、それはそれとして、「原稿の中の悪魔」の中には、もう一人、重要な人物が出て来る。この人物は、オペロンの友人というだけで、名前も記されていないし、性格もよく分からない。彼は、ただ、オペロンの勤める法律事務所を訪れて、いら立つオペロンの相手をしながら、じつと彼のやる行為を見つめているだけ、と言つていい。激しい感情に揺れるオペロンと違って、彼は、じつに手ぎわよく、友人の話に受け答え、友人の行為にも、あまり干渉することなく、いわば成り行きだけを、克明に観察

するのである。ここにあるのは、真の意味での対話ではない。いわば、対話に移る前の、じつと相手を探る目がある、と言ったほうがいい。これも、また、作者の分身であるに違いないが、自己嫌悪そのものに取って代るべき、「呪われた原稿」とは、どのような関係に立つか、ということが問題になる。

なるほど、いざ火に入れようとした時には、腕をつかんで止めようとするが、燃すことを主張し、燃えた時の喜びを語る、オベロンの言葉を耳にしながら、この友人は、真剣に反対しようとは思っていないのだ。そして、いっしょにシャンパンを飲み、ほろりと酔ったりするほど気安い。かたわの子供を腕に抱こうとするように、オベロンが、原稿を引き寄せると、彼は、じつと見ているのだし、ダンテさえ引き合いに出して、原稿をめくる、地獄の苦しみを口にしたたり、自分の魔法にひっかかった被害者だ、と言うオベロンに、そういう苦しみの中にも、幸福があったかもしれない、と彼は言うのだ。それもこれも、彼は、じつに冷静な観察家であるからだ。原稿を燃す決意を聞かされた彼は、ひそかに次のように思う。

わたしは、この作者が、ひじょうに好きだったけれども、彼の書いた作品は、火で燃した時のほうが、ずっと光り輝くと、ひそかに考えていたので、この決定に、あまり強くは反対しなかった。⁽¹³⁾

これと同じ顔が、『トワイヌ・トールド・テールズ』の序文にも顔を出す。そして、冷静に判断し、榨え目に意見を吐いている、このオベロンの友人と違って、『テールズ』の序文の場合には、激しいオベロンの心情をも含んだ、自信に満ちた、そう快さすら感じられる。

これ以外の、ほかの作品は、ほんのわずかの間しか存在しなかったが、それでも、明るさという点では、うまく新聞雑誌に載った作品よりも、ずっと明るい運命を辿った。つまり、作者は、情けも、良心の呵責も、（おまけに、あとに続くはずの後悔も）感じないで、それらを燃してしまい、自分の呪わしい原稿を、よく知っていた

ので、そんな退屈な作品が、ぼろぼろと、煙突に火が燃え上がるほど、燃えやすいものであったかと考えて、何度か驚いた。⁽¹⁴⁾

もちろん、この二つの引用には、共通のアイロニーがあって、燃してしまふべき、暗い呪わしい原稿は、それが燃える時の火の明るさと、対比されている。そして、火の明るさは、呪わしい原稿にまつわる、あまり、ぼつとしない体験、たとえば、現実を離れて、夢みたいなものばかり追い続けたとか、幻に取り囲まれたとか、氷の壁にぶつかるといった、それなりに、いわば説明のできるような体験を、一気に克服する助けとなるだけではなく、それらの体験で培われ、しかも、無意識のうちに、自己体験を繰り返しながら、自己嫌悪にまで、ふくらんできたものに、存在証明を与えることにもなる。

作家が作家を素材にして、文を書くことは、珍しいことではないし、また、その場合、たまたま描こうとする主人公が、作家だったというような、単純なことではないはずで、何か、それ以上に深刻なものが問われている、と考えるのもいいと思う。現に、ホーソーンにしても、ここで扱った「原稿」も含めた、いわゆる「オペロン物語」(Oberon stories)⁽¹⁵⁾と称される、「一連の作品の一つ」、「孤独な男の日記の断片」: "Fragments from the Journal of a Solitary Man"の中で、同じく、原稿を燃してくれるように、と友人に頼んで死んで行った、若い作家を、その日記を通して描いている。「原稿」と、ほぼ同じころに書かれたらしいことと、⁽¹⁶⁾「原稿」よりも、もっと感受性の豊かさを示している、と思えることから考えると、日記の内容は、また別の意味で興味深い、この「日記の断片」も、「原稿」の場合と同じように、主人公を観察している、冷静な「わたし」が居て、「人生の喜び」を、じかに手で捕らえることのできない、いら立ちと倦怠を、若くして死ぬ青年に、ありのままに表現させることに、成功している。

彼が、わたしに言った最後の言葉は、次のようなものだった。「ぼくの原稿を燃してくれ。むこうの机の中にあ

るもの全部だ。だまされて出版してしまうようなものが、あるといけないからな。ぼくは、もう、たくさん出版したんだ。きみに預けてある、古い、ばらばらの日記については——」ここまで言うのと、いつも、彼を捕らえて離さなかった、あの、いつもの、うつろな咳のために、気の毒な友人は、しゃべれなくなった。そして、咳き込んだまま疲れて、眠ってしまった。わたしは、彼が目覚めるのを待って、その日の真夜中から真昼まで、じっと見守っていた。部屋は暗かったので、光が欲しいと思って、やがて、わたしは兩戸を開けた。すると、何としたことか。ぱっとした明るい光が、冷たくなった死人の顔を照らし出した。

この「わたし」は、このあと、オペロンに言われたとおり、原稿を焼いてしまう。そして、あとは、始末するかどうかについて、聞きそびれてしまった日記を、公表したい気持ちになったことや、オペロンの人柄を、少し紹介するだけで、ただ、影のような役割しか、果たしていないのである。燃してしまった原稿が、どんなものだったかについて、まったく、そっけない説明しかなされていなくて、ここに引用した情景から判断すると、ちょうど「原稿の中の悪魔」の「わたし」が、燃える原稿を見つめていたように、「孤独な男の日記の断片」の「わたし」は、死の床で、オペロンが死ぬのを、じっと「見守っていた」ことは確かなのだ。原稿を燃すことが、大きな問題ではないのだ。原稿にまつわる、あるもの、原稿を通して、認知できるような、あるものが消えること、が問題になっているのだ。そして、これも、また、『テールズ』の序文が、ある程度のことは暗示してくれている。

言うまでもないことだが、スケッチ風の作品には、深みがない。しかし、もっと注目すべきことは、作者の側に、深めようとする意図が、ほとんど見られないことだ。これらの作品には、文章の形で取り交わされる、孤独な自己との交渉を示すような、観念の難しさや、表現の曖昧さといったものは、まったくない。

なぜ深めようとしなかったのか、という理由を、ホーソーンは、次のように説明している。

これらの作品は、世間から引きこもった人間が、自分の知性と感情を相手にして、取り交わした話なのではなくて（もし、そうだったならば、もっと、深く永久的に、価値のあるものになっていたはずだ）、そうした人間が、世間と交渉を始めようとする試みであり、また、きわめて不完全ながら、成功している試みなのだ。⁽¹⁹⁾

ここには、一つの完結がある。なぜなら、たとえ「呪わしい原稿」がどうであれ、とにかく「呪わしくない原稿」のあることも、認められるからであり、作者自身が、ここに、はっきりと言っているように、これらの原稿は、自分の殻に閉じこもるのとは反対の方向に、道を開いたからである。そして、これを成立させたものは、おそらく、「孤独な男の日記の断片」と、「原稿の中の悪魔」の中に登場する、「わたし」の示す冷静な判断力だった。

原稿を焼いたエピソードについては、有名な「ファンショー」*Fanshawe* (1828) の焼却と、書かれたはずの作品で、残っていないものがあった、これらも、同じ運命をたどった、と推定されていることにも、触れないわけにはいかないだろう。⁽²⁰⁾しかし、現実には、燃した行為を、作品に描いたとなると、単なる感傷でもって、このエピソードを取り扱うべきではなくて、あとに続く影響に、重きをおいて考えるほうが、より実り多いものを、期待できると思う。すでに発表した作品を、いくつかの短篇集に、つぎつぎに収録していった中で、「原稿の中の悪魔」は、最後の短篇集に、やっと取り上げられ、「孤独な男の日記の断片」のほうは、いちど雑誌に発表されただけで、彼の生存中は、ついに短篇集に載らなかつた。それにもかかわらず、『トワイストールド・テールズ』の序文に見るように、この体験の記憶は、若い時の文学への出発と一つになって、おそらく、消えることはなかつたのだらう。したがって、言葉を変えて言えば、これは、これだけで、ホーソーンの深刻な、内面的体験の一つだった、と考えていいことだと思う。

子供のために書いた、一八四二年の『伝記物語』*Biographical Stories for Children* の中の、'Sir Isaac Newton' の項で、ホーソーンは、ニュートンが、二十年にもわたる、研究の成果を記録した原稿を、愛犬の倒し

た、ろうそくの火で、燃してしまった情景を描いている。

ちょうど原稿が燃えてしまった時に、ニュートンは部屋の戸を開けた。そして、二十年の苦心が、灰の山になってしまったのを見た。そこに、これを仕出かした、愛犬のダイヤモンドが立っていた。ほとんど、どんな人でも、こんな場合だったら、ただちに犬に、死刑の宣言を下しただろうが、ニュートンは、胸は、はち切れそうに悲しかったにもかかわらず、いつもの優しさで、犬の頭をなでてやった。⁽²⁾

この情景を描きながら、原稿が燃えるとはどういうことかを、よく知っていたホーソーンは、ニュートンの、人としての偉さを、強く打ち出すのに、大いに自信を持っていたに違いない。

注

- (1) 'You cannot conceive what an effect the composition of these tales has had on me. I have become ambitious of a bubble, and careless of solid reputation. I am surrounding myself with shadows, which bewilder me, by aping the realities of life. They have drawn me aside from the beaten path of the world, and led me into a strange sort of solitude—a solitude in the midst of men—where nobody wishes for what I do, nor thinks nor feels as I do. The tales have done all this. When they are ashes, perhaps I shall be as I was before they had existence' Nathaniel Hawthorne, *The Snow-Image and Uncollected Tales*, Ohio State Univ. Press, 1974 (The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne Vol. XI), p. 172.
- (2) *Ibid.*, p. 171.
- (3) 'But, there does seem to be one honest man among these seventeen unrighteous ones, and he tells me fairly, that no American publisher will meddle with an American work, seldom if by a known writer, and never if by a new one, unless at the writer's risk.' *Ibid.*, p. 173.
- (4) '..... I have a horror of what was created in my own brain' *Ibid.*, p. 171.

- (c) '..... Sometimes my ideas were like precious stones under the earth, requiring toil to dig them up, and care to polish and brighten them; but often, a delicious stream of thought would gush out upon the page at once, like water sparkling up suddenly in the desert; and when it had passed, I gnawed my pen hopelessly, or blundered on with cold and miserable toil, as if there were a wall of ice between me and my subject.' *Ibid.*, p. 174.
- (d) '..... My picture, painted in what seemed the loveliest hues, presents nothing but a faded and in distinguishable surface. I have been eloquent and poetical and humorous in a dream—and behold! it is all nonsense, now that I am awake.' *Ibid.*, p. 175.
- (e) '..... An outlaw from the protection of the grave—one whose ashes every careless foot might spurn, un honored in life, and remembered scornfully in death!.....' *Ibid.*, p. 175.
- (f) See C. E. Frazer Clark, Jr., *Nathaniel Hawthorne: A Descriptive Bibliography*, Univ. of Pittsburgh Press, 1978, pp. 197, 415.
- (g) The Author of *Twice-Told Tales* has a claim to one distinction, which, as none of his literary brethren will care about disputing it with him, he need not be afraid to mention. He was, for a good many years, the obscurest man of letters in America. Nathaniel Hawthorne, *Twice-Told Tales*, Ohio State Univ. Press, 1974 (The Centenary Edition Vol. IX), p. 3.
- (h) an enjoyment [the pleasure itself of composition] not at all amiss in its way, and perhaps essential to the merit of the work in hand, but which, in the long run, will hardly keep the chill out of a writer's heart, or the numbness out of his fingers. To this total lack of sympathy, at the age when his mind would naturally have been most effervescent, the Public owe it, that the Author can show nothing for the thought and industry of that portion of his life, save the forty sketches, or thereabouts, included in these volumes. *Ibid.*, pp. 3-4.
- (i) They have the pale tint of flowers that blossomed in too retired a shade—the coolness of a meditative habit, which diffuses itself through the feeling and observation of every sketch. Instead of passion, there is sentiment; and, even in what purport to be pictures of actual life, we have allegory, not always so warmly dressed in its habiliments of flesh and blood, as to be taken into the reader's mind without a shiver. Whether

from lack of power, or an unconquerable reserve, the Author's touches have often an effect of 'tameness; the merriest man can hardly contrive to laugh at his broadest humor; the tenderest woman, one would suppose, will hardly shed warm tears at his deepest pathos. This book, if you would see anything in it, requires to be read in the clear, brown, twilight atmosphere in which it was written; if opened in the sunshine, it is apt to look exceedingly like a volume of blank pages. *Ibid.*, p. 5.

- (21) See Kenneth Dauber, *Rediscovering Hawthorne*, Princeton, New Jersey : Princeton Univ. Press, 1977, p. 56.

- (22) I did not very strenuously oppose this determination, being privately of opinion, in spite of my partiality for the author, that his tales would make a more brilliant appearance in the fire than anywhere else. Hawthorne, *The Snow-Image*, p. 173.

- (23) The remainder of the works, alluded to, had a very brief existence, but on the score of brilliancy, enjoyed a fate vastly superior to that of their brotherhood, which succeeded in getting through the press. In a word, the Author burned them without mercy or remorse, (and, moreover, without any subsequent regret,) and had more than one occasion to marvel that such very dull stuff, as he knew his condemned manuscripts to be, should yet have possessed inflammability enough to set the chimney on fire! Hawthorne, *Twice-Told Tales*, p. 4.

- (24) See Lea Bertani Vozar Newman, *A Reader's Guide to the Short Stories of Nathaniel Hawthorne*, Boston, Mass.: G. K. Hall & Co., 1979, p. 126.

- (25) See Elizabeth Lathrop Chandler, *A Study of the Sources of the Tales and Romances Written by Nathaniel Hawthorne Before 1853*, Folcroft, Pa.: The Folcroft Press, Inc., 1926 (reprinted 1969), p. 58. See also Newman, *A Reader's Guide*, p. 125.

- (26) The last words he said to me were, "Burn my papers—all that you can find in yonder escritoire; for I fear there are some there which you may be betrayed into publishing. I have published enough; as for the old disconnected journal in your possession—" But here my poor friend was checked in his utterance by that same hollow cough which would never let him alone. So he coughed himself tired, and sunk to slumber. I watched from that midnight hour till high noon on the morrow for his waking. The chamber was dark; till, longing

for light, I opened the window-shutter, and the broad day looked in on the marble features of the dead! Hawthorne, *Snow-Image*, p. 312.

(2) The sketches are not, it is hardly necessary to say, profound; but it is rather more remarkable that they so seldom, if ever, show any design on the writer's part to make them so. They have none of the abstruseness of idea, or obscurity of expression, which mark the written communications of a solitary mind with itself. Hawthorne, *Twice-Told Tales*, p. 6.

(3) They are not the talk of a secluded man with his own mind and heart, (had it been so, they could hardly have failed to be more deeply and permanently valuable,) but his attempts, and very imperfectly successful ones, to open an intercourse with the world. *Ibid.*, p. 6.

(4) See Julian Hawthorne, *Nathaniel Hawthorne and His Wife: A Biography*, Vol. 1, Archon Books, 1984 (reprinted 1968), p. 124.

(5) Just as the destruction was completed, Newton opened the chamber-door, and perceived that the labors of twenty years were reduced to a heap of ashes. There stood little Diamond, the author of all the mischief. Almost any other man would have sentenced the dog to immediate death. But Newton parted him on the head, with his usual kindness, although grief was at his heart. Nathaniel Hawthorne, *True Stories From History and Biography*, Ohio State Univ. Press, 1972 (The Centenary Edition Vol. VI), p. 236.